

阿佐ヶ谷教会



信友会 会報

修養会特集 (2018 年 7 月 27 日～28 日開催)

教会標語 「あなたの重荷を主にゆだねよ。主はあなたを支えてくださる。」 (詩編 55 編 23 節)

修養会テーマ ゆだねる

場 所 ナザレ修女会 エピファニー館



毎年夏に開かれる信友会修養会はその内容とは別にいつも天候には恵まれないような気がします。今年も終了間際に、台風 12 号の強烈な豪雨に見舞われました。災害も多い年でした。暴風や豪雨、地震など大きな災害が日本列島を縦断しました。

人々はずっと昔から自然の脅威に向き合い暮らしていましたが、ここ数年におきた被害は実は自然と正しく対峙していなかったのではと思えてきます。今も避難所で生活をしている人々に思いを寄せ、祈るばかりです。

この夏の終わりに、船本弘毅先生が主の御許に召されました。

信友会例会では明解な聖書講解を何度もしていただき、また教会内外での親しい交わりの時間を共に持つことができ本当に感謝しています。ありがとうございました。(Y. O)

開会礼拝 古屋治雄牧師

コリントの信徒への手紙二
第 11 章 16 節～29 節

今年度の信友会の修養会のテーマは、教会標語の「あなたの重荷を主にゆだねよ。主はあなたを支えて下さる」(詩編 55 章 23 節)、修養会テーマに「ゆだねる」としています。

阿佐ヶ谷教会の信友会は、これまで私の属した教会や昨今の教会事情を見ても、壮年男子の部会としてその運営と活動や教会奉仕の主体となっていて、そういう教会は少ないと思います。信友会がこれまで築いてきた良い伝統をこれからも継承していただきたい。

ときわ木会の修養会では、標語の「重荷」に力点をおいて行われていますが、信友会は、標語の中から「重荷を主に委ねる」こと、今日的な不安や苦悩を主に委ねることによって生きること、に力点を置いています。

この問題を考える参考として、伝道者としてのパウロの重荷、思い煩いや苦悩を考えることにします。パウロは、完成された人物、確固たる信仰を持ち非の打ちどころのない伝道者と考えることが多いのですが、パウロもまた多くの困難や悩みの内にあった人でした。その視点を見なければパウロの本当の姿を見失ってしまいます。

コリントの信徒への手紙二第 11 章 16 節～29 節には、「使徒としてのパウロの労苦」の小見出しがついています。パウロの伝道は、決して順調ではなく彼が創設した諸教会でもそれぞれ問題を抱えていました。この手紙を書いたコリントの教会は危機的な状況にあり、種々な問題が鬱積していた中で書き送った手紙です。偽預言者、ずる賢い者たちなどに扇動され困難に陥った教会に対してパウロは恐れるなど語るのです。パウロはコリントの困難をみて優しい言葉による励ま

ではなく、もっと厳しい指摘をすべきであったと言っています。16 節で、「だれもわたしを愚か者と思わないでほしい。しかしあなた方がそう思うなら、わたしを愚か者と見なすがよい。そうすれば、わたしは少しは誇ることができる」と語っています。23 節では、「キリストに仕える者なのか。気が変になったように言いますが、わたしは彼ら以上にそうなのです。」そしてパウロが被ってきた苦難について数え上げます。投獄、鞭打ちなどで死の恐怖を与えられ、旅の途中では川の難や盗賊、同胞から、異邦人からの難など書き上げています。28 節で、こんな中で日々迫るやっかい事、あらゆる教会の心配事を聞いて心配し、誰かが弱っているとき、つまづいているときにはパウロも弱り、心を燃やしていると言っています。パウロは持病をもっており、何度も自らが肉体のとげを持つ身であることを語っております。

ときわ木会の修養会では各自の「重荷」を書き上げた中で多いのは家庭内のこと、体調不安や家族の平安や仕事のこと、また今日の時代で不透明な政治的環境などが挙げられました。私たちがまた順調な生活の中での信仰を望むのではなく、そのような困難の只中で神を見上げて信仰生活を続けてゆくことです。私たちが弱さを痛感し、弱さを突きつけられ



るなかで、それを避けようとせずに受け止めることが大切なのです。

12 章 9 節以下でこう語っています。「すると主は、『わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中にこそ十分に発揮されるのだ』と言いました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いのです」。

私たちの弱さのなかに神さまが力を注いでくださるということです。自分たちがさまざまな修練を通して力を作り上げるのではなく、神さまが注いでくださる力を信じて受けることが大切です。そしてむしろ弱さを誇ることです。このことを知っている者は信仰的な力が与えられること、神さまの力を受けて重荷に押し潰されずに生きる信仰を学ぶ時にしたいと思います。

(文責：玉澤武之)

主題講演 古屋治雄牧師

「あなたの重荷を主にゆだねよ。主はあなたを支えて下さる。」

修養会テーマ「ゆだねる」

聖書：詩編 第 55 章、マタイ福音書第 11 章 25—30 節



今年度の信友会修養会は、テーマを詩編 55 章 23 節の教会標語を、修養会テーマは標語にある「ゆだねる」としました。先ず、ゆだねるべき「重荷」は聖書にはどのように表現されているのかを考えます。ここでは重荷、思い煩い、信仰生活での不安などが考えられますが、旧新約聖書には、「重荷」という言葉は 44 個所に出てきます。どのような内容であるかを分析すると 6 分野に分類できます。

「聖書に語られる重荷」

① 生活上のあらゆる苦労としての「重荷」:

「どうしてひとりであなたたちの重荷、もめ事、争

いを負えるだろうか」(申命記 1:12)、モーセは人数の増えた民を一人では背負えないと言い役割を担う長を増やしました。「疲れた者、重荷を負う者はだれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。」(マタイ11:28)、ここではすべてを含む重荷をイエスさまが背負って下さるという恵みです。誰でも私のところに来なさいと招いて下さいます。「互いに重荷を担いなさい。そのようにして、キリストの律法を全うすることになるのです。」(ガラテヤ6:2)、「めいめいが、自分の重荷を担うべきです。」(ガラテヤ 6:5)教会員が相互に高め合うように勧めており、生活全般を含んだ重荷を示しています。

- ② **悪、罪と結びつく、苦悩としての「重荷」:**「わたしの罪悪は、頭を越えるほどになり、耐えがたい重荷になっています。」(詩編38:5)、罪悪感についての重荷で、生活全般の重荷ではありません。
- ③ **正義、平和を希求するゆえに負う「重荷」:** 詩編 55 章全体を包括して詠われています。イスラエルの中で正義が完成していないこと。18 節では「夕べも朝も、そして昼も、わたしは悩んで呻く。神はわたしの声を聞いて下さる。」都には不法と争いがあり、町中に災いと労苦が、広場には搾取と詐欺がある、など国中に乱れがある中で、23 節の標語の「あなたの重荷を主に委ねよ、主はあなたを支えて下さる。」と詠われます。正義、平和を希求する祈りになっています。
- ④ **モーセにとって民が「重荷」:** モーセは主に言った「あなたは、なぜ、僕を苦しめられるのですか。なぜわたしはあなたの恵みを得ることなく、この民すべてを重荷として負わされねばならないのですか。…」(民数記 11:11)モーセの苦悩が現れており、モーセ一人がイスラエルの民の指導者としてイスラエルの民全体を養い導かねばならないことへの苦悩が現れています。
- ⑤ **民が神を「重荷」とした:**「しかしヤコブよ、あなたはわたしを呼ばず イスラエルよ、あなたはわたしを重荷とした。」(イザヤ 43:22)神は、イスラエルの民が神を敬わず、焼き尽くす捧げものもしない。民が神を軽視し重荷に思っている。
- ⑥ **神にとって民が「重荷」とされる:**「お前たちこそ重荷だ。わたしはお前たちを投げ捨てる。」と主は言われる(エレミヤ 23:33)神の言葉を聞かないで神を利用して偽りの託宣を発する偽預言者に激しい言葉を発しています。私たちも

神から遠ざけられないよう自らの信仰生活を見直す必要があります。

このように聖書に書かれた 6 種の「重荷」を引用しました。

「ゆだねる」の意味

詩編 55 編の聖句について、「ゆだねる」について考えます。この部分についての種々な聖書の表現を比較します。

「汝の荷をエホバにゆだねよ」(文語訳)

「あなたの荷を主にゆだねよ」(口語訳)

「あなたの重荷をヤハウェに投げかけよ」(岩波訳)

「Cast your cares on the Lord」(New English Version)

ヘブライ語の原語は、シャラーハで「投げる」、「送る」という意味です。上記の岩波版も英語版の「投げかけよ」、と訳しています。

はこぶね 6 月号にシオン会 4 月例会の聖書の学びから今年度の標語に向けて書かれた中野実先生の文章があります。先生は、「Ⅰペトロ 5:7 にある『思い煩いは、何もかも神にお任せしなさい』という教会標語詩編 55 章 23 節を引用した個所から、ヘブライ語とギリシャ語に解釈を求めたところ、『重荷』は『思い煩い』に、『ゆだねる』、『任せる』は『ほうり投げる』になる。私たちは、『重荷』、『思い煩い』を神さまにほうり投げてしまってもよい。なんと幸せなことか。」と書いておられます。

思い煩いをどう投げるのか。もう知らないで投げ捨てるのではない。主なる神に向かって投げるのです、重荷を投げると自分からその事柄が離れてゆきます。自分で何とか処理しようとするのではない。自分で投げる行動が、いかなる行動になるかを分析することに限界があります。

詩編 55:23 には続きがあります。「主はあなたを支えて下さる。主は従う者を支え、とこしえに動揺しないように計らってくださる」神さまとの関係から、神さまが受け止めて下さることが離れがたく結びついているので、安心して投げる



ことができるのです。

詩編 55 章での「重荷」は個人的な悩みや思い煩いではありません。この時代は悪がはびこり、民は悩み呻く時代でした。こんな時代に神の正義を求めている信仰者がいたのです。

マタイ福音書 6 章 33 節に、「何よりもまず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。だから、明日のことまで思い悩

むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。」私たちの日々の生活は順調なものだけでなく、生活の中にある労苦があることをイエスさまは受け止めて下さるのです。労苦を受け止めながらその労苦はその日だけで十分であると言って下さる。明日に持ち越さない。なんとという慰めでしょうか。イエスさまは私たちの重荷をご存知なのですからイエスさまに向かって投げるができるのです。

「重荷」を「ゆだねる」

マタイ福音書 11:28 の主イエスの御言葉「疲れた者、重荷を負う者はだれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。」そして「わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの轡を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたは、安らぎを得られる。私の轡は負いやすく、わたしの荷は軽いからである」。主イエスはすべての重荷に疲れているだけでも招いていて下さる。一方、わたしの轡も負いなさいと言っているように二重の重荷があると解釈されがちです。そうではなくて、私たちがゆだねる以前に私たちの「重荷」を主イエスは「私たちの轡」として負っていて下さっているのです。主イエスは私の重荷を 2 頭立てで用いる轡のように私と共に担って下さるという表現もあります。

「全ての重荷をかなぐり捨てる」

ヘブライ人の手紙12:1に「すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか。信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。」この聖句は修養会のための祈祷会で日高好男会長が取り上げました。ここでは重荷は罪につながっています。「ゆだねる」ということを「かなぐり捨てる」。ゆだねること、投げかけることを「かなぐり捨てる」と言っています。ただ、捨てると言っても神との関係のないところに捨てるのではなく、マタイ福音書 11 章、詩編 55 章のゆだねる、投げるように主イエスが全責任を負って下さる故にかなぐり捨てることができるのです。

私たちは、信仰の先達者に囲まれています。先達者が困難をいかに闘ったかを見ながら、証人たちの道に学ぶことが大切です。信友会でも多くの信仰の先達が居られ、その人々の信仰の闘いを模範にして前進する伝統を残したいものです。ヘブライ 12:2 には、「信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。このイエスは、御自身の前にある喜びを捨て、恥をいともわなないで十字架の死を耐えて忍び、神の玉座の右にお座りになったのです。」信仰の創始者である主イエスがいて受け止めて下さるから、絡みつく罪をかなぐり捨てることができるのです。このかなぐり捨てるはゆだねるとは原語は違いますが意味の上では共通性があります。

詩編 55 章 23 節後半での「とこしえに動揺しないように計らってください」という言葉には、一人の信仰者のみならず、神の民の歴史においても神さまが支えて下さっていることを信じて、神さまに重荷を動揺しないで「ゆだね」、「投げかけ」、「かなぐり捨てる」信仰を養ってゆきたいものです。

(文責：玉澤武之)





写真は男声合唱「共にうたおう」讃美歌練習

8月例会（シオン会との合同例会）

8月26日（日）12：30～14：45 於：つぼみホール

参加人数：シオン会 25名、信友会 25名、教職その他 5名

信友会・シオン会の合同例会が8月26日（日）の午後ホールで開催されました。信友会有志の手製の「ダラス風サラダうどん」で始まり、B.ルシード兄の「ダラスの教会」の説明や教会生活の話と英語の「主の祈り」の勉強、聖書クイズ、讃美歌イントロクイズ、混声合唱練習など盛り沢山のプログラムに参加者は楽しい時を過ごし、部会同士の素晴らしい懇親の機会となり、感謝でした。（日高好男）



（写真：松田俊彦、小笠原敦久 記録：玉澤武之、日高好男、日比谷豊 編集：荻原雄二）